

Title	四、修史史の一般について
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.17, No.1 (1938. 8) ,p.114- 122
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	海外史壇紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380800-0114

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の最低評價の三分の一よりも少額であることによつても貢物なる語の使用は不穩當であるとの意見であり、委員會は兩國の教科書がこの問題に關し兩國の意見を共に記載することを希望してゐる。

(三十四) ヴェルサイユ條約第二百三十一條は、戰爭の勃發に對し、ドイツに倫理的責任を負はせたものでなくして民法上の事項としてその責を負はせんとしたのであるが、その起草の形式、ドイツの抗議に對する返答、聯合國政府による解釋などによりドイツ國民をして賠償支拂の義務に倫理的責任を結びつけられたものと信せしめるやうにした。留保としてドイツ委員は二百三十一條が無効とせられない限り、ドイツの教科書はドイツの倫理的非難を伴ふ重要な文書として取扱ふのが正しいと附加し、フランス委員は政治的見地よりこの解釋に全體的留保をなした。(三十五)

四、修史史の一概について

間崎万里

修史の歴史に關する G. P. Gooch 氏の諸著については曾て本誌に紹介したところであるが、今度 H.E. Barnes 氏により英文で第二の良著 A. History of Historical Writing, 1937 が刊行せられた。その中から修史史の現狀に關する記事を若干補訂し且つなるべく原書名に復してこれを紹介する。

古代の歴史的著作についての恐らく最初の考察は、ローマ史に關する舊式の著述の方法及び成果を批判検討したるポリヴィウスの著作の中に見られる。ギリシャ及びローマの歴史的著作の大部分は當代の歴史を取扱つたものであつた。それ故、以前には何れかの或る時期を取扱つた作家がなかつたので、その時代について前にかいだ史書を組織的に討議し批判することは出來なかつた。次いでエリウス・アフリカヌスからジエロームに至る

までの初期キリスト教の年代記作者により異教徒及びユダヤ教徒の歴史的著作に對する批評があつた。中世を通じて、中世の編年記及び年代記作者は、自己の稿本にこれを寫し取るだけであつたにしても、以前の歴史的著作を考慮した。過去の史書に對する一層系統的な研究は、宗教改革及び

反宗教改革の論争中に發生した。マグデブルグ年鑑(註)の編者樞機員バロニウス等は使徒時代から第十六世紀に至るまでの教會史の著作を精細に批評した。次いで Flavius Blondus から Sigerius と Lévesque de Pouilly に至るまでの人文學者は古代及び中世史の著作を分折した。Aben Egra から Astruc と Reimarus に至るまでの聖書批判の初期研究者は聖記の史料を検討した。この方面的研究は合理論者及び浪漫主義者により遂行せられ、遂に國民史の資料蒐集の運動が進み、近代の考證史學が出現するに及んで、系統的意識的に行はれる

ことになつた。Muratori, Waitz, Guizot, Molinier, Guerard, Stubbs などの如き、大編纂家は初期キリスト教及び中世の年代記作者の著作を批判的に検討した。ニーブル、ヴァイツ及びフォン・ランケの如き學者は、古代、中世及びルネサンスの史家を批判的に評價した。

(註) Magdeburg Centuries (Magdeburger Zenturien) は新教的見地から書かれた最初のキリスト教會通史に附與された名稱であつて、マグデブルグで編纂せられたこの物語は各一百年の時期に分たれ、一五六二年にラテン語で記された。その主たる著者は改革家の Matthias Flacius であり、他のルーテル派の神學者の助力を仰ぎ、その經費はドイツの新教の若干君主達により支辨せられた。最初 Historia ecclesiae Christiani としてその七巻がベーゼルで公刊せられた(一五五九—七四)。本書は一四〇〇年までの教會史を取り扱つたもので、その著作せられた時代から見れば、著者達の學識に對する顯著な記念物である。その前半はドイツ語に翻譯せられた (Jena, 1560—65)。何等か文獻的の仕方に於て修史史と見做し得る最初の注目すべき書籍を作らせたものは編纂事業であった。それは國民史資料案内、即ち過去の主

として中世と近世初期の國民的著作の出なる史書を簡約したものであつた。その最初のものは、一八二〇年に Friedrich Dahlmann の刊行したドイツ修史の小案内書なる *Quellenkunde der deutschen Geschichte* であつた。本書は Georg Waitz によって改訂もられて數版を重ね、一九一一年の第八版は Paul Herre によって編纂もいわば浩瀚なるものとなつた。最近更に第九版が出で二卷に分冊された。

Wilhelm Wattenbach も Ottokar Lorenz の *Deutschlands Geschichtsquellen im Mittelalter* は中世に關して一層完全に近づくのである。フランスに於ては Gabriel Monod の *Bibliographie de l'histoire de France depuis les origines jusqu'en 1789* が

ドイツ史のダーレマン・ヴァイツに比較するべく業績を擧げてゐる。またドイツ中世史のヴァンケルハベックの業績に相當するものは、Auguste Molinier, Henri Hauser, Emile Bourgeois,

André Louis の『フランス史資料』(註)に關する精緻なる著作であつて、一七一五年に至るまでのその書目を批判してゐる。アメリカ人の史家 Charles Gross の *Sources and Literature of English History* による英國中世史の著作にいわ權威ある調査を遂げたが、Godfrey Davies により續修せられてスチニアード期を完結してゐる。他のヨーロッパ諸國にも大抵それべ書目案内が出来てゐる。それ等は後述の *Guide to Historical Literature* に掲載せられてゐる。Channing, Hart 及び Turner の權威ある米國史籍解題を出してゐる。

(註) 聞鈴万里、現代フランスの史學 (『フランスの社會科略』用三三一四頁) 參照。

中世の修史史の立派な入門書は James Gairdner, Gustav Masson, 及び Ugo Balsani の *Early Chroniclers of Europe* とする叢書の出で、英、佛、伊を含み、ドイツの中世史の著作について若干の材

料を提供してゐる。ドイツの中世の修史について 1
層詳細なる知識を得んとすれば上記のヴァッテン
バッハとローレンツの著述を參照しなければなら
ぬ。中世の終末以後の全修史を簡約し批評したも
のはフランスの權威、ラングロアの良著『史籍書
目提要』に頼るべれどある。又 Charles Kendall
Adams, Manuel of Historical Literature など頗る便
利であるが、その續修も既にぐれ、George M.
Dutcher, William H. Allison 等により訳書、編纂
せられた要書 Guide to Historical Literature によ
り、一八八九年乃至一九一〇年間に刊行せられた
書物に特に注意が向けられてゐる。最近その廉價
版も出でてゐる。

以上は偶々修史の歴史に觸れてゐるに止まり、
未だ眞の修史史とは言へないものである。初から
その目的を以て著作した最初の修史史は恐らく
Robert Flint, the Philosophy of History in Europe:
France and Germany, 1874 であらう。その後二十
年間にフリントはフランス史に關する部分を大
くして全一冊の書物を作つたが、ドイツ史に關す
る部分は大あくならなかつた。本書は歴史哲學の
歴史の範圍を超えるものであつた。フリントの著
述が出版せられて以後修史の歴史に關する多數の
著作が出でた。以下混雜を避けるために、出版順
によひやに、じぶを歴史の時代別によつて記述し
て見よう。

古代全般を取扱つたものでは、James T. Shot-
well, Introduction to the History of History によれば
るものがない。本書は原始の社會からキリスト
教初期の年代記作者に及ぶ史書を取扱つてゐる。

ショットウェル教授は『大英百科辭典』の中に、『歴史』
といふ見事な論文を執筆し、修史の全般を取扱つ
た書物を書く意向を洩してゐたが、その第一篇を
完成したは止まる。古代の修史に關しては他に包

括的な著述は何處にも存しなる。近東に關するものでは Joyce O. Hertzler, The Social Thought of the Ancient Civilizations が最も價値がある。James H. Breasted, Ancient Records of Egypt は古之物語による人の比較的重歴なる史書の釋釈を提供し、Adolf Erman, the Literature of the Ancient Egyptians は重歴である。古ペルシアの修史は露やるが A. T. Olmstead, Assyrian Historiography が最も良の入門書である。日本に出てすぐあるのが Robert F. Harper, Assyrian and Babylonian Literature; G. A. Barton, The Royal Inscriptions of Sumer and Akkad; D. D. Luckenbill, Ancient Records of Babylonia and Assyria の二つは多數の歴史的正文の翻譯がある。くへへ人の修史の入門書は多數あるが、その中で George Foote Moore, Literature of the Old Testament は最高の王室記録を與ぐ。古代ヨリシャ人の修史に關するものは

John B. Bury, The Ancient Greek Historians の極其な著述がある。ローマ修史の歴史と藏めておる。これに類似したローマの修史に關する著述は Wilhelm Soltau のものである。又 Arthur Rosenberg, Einleitung und Quellenkunde zur römischen Geschichte. Hermann W. G. Peter, Die geschichtliche Litteratur über die römische Kaiserzeit bis Theodosius I. und ihre Quellen. これらローマ史資料の技術的調査がある。後者は『眞理と藝術』(Wahrheit und Kunst)に於て、古代史が修辭に降服せんことを鮮かに説いてゐる。ヨリシャとローマの個々の史家に關する豊富の著述の中、Glover の ローランス、Grundy, Abbott, Cornford のキャサルベ、Bossier のタキッスに關するもの達が代表的である。

キリスト教の修史に關し最高の入門書は Gustav Krüger, Early Christian Literature である。An-

dré Lagarde, the Latin Church in the Middle Ages の中止は、中世の宗教史家の簡單な成る田録が載つてゐる。一九一一年の『ムエック史學雜誌』に初めて公表された Moritz Ritter, Die Christliche-mittel-alterliche Geschichtsschreibung は、論完全なるものである。中世の修史に關する著述はすぐて當然キリベト教の年代記作者を取扱つてゐる。Peter Guilanday は Eusebius から第十九世紀後半の Denifle; Pastor の如き史家に至るまで、カトリックの代表的史家の記事を載せた良著を編してゐる。

中世初期の修史についての最良の入門書は C. J. H. Hayes, Introduction to the Sources Relating to the Germanic Invasions である。又 Tout 教授及び Jenkins 教授並に Dr. Stanley Lane-Poole の中世の年代記作者に關する良入門書があり、Miss Schulz の中世の歴史研究法に關する傑著がある。『ヨーロッパの初期年代記作者』叢書については

前述の如くであるが、ビザンチニアの史家に關する英文の唯一の入門書は A. A. Vasiliev, History of the Byzantine Empire 中止散見やへる。又本書止は（第一篇 111—154）中世の東帝國に關する近代の全史籍に關する適切なる批評がある。ビザンチニア修史に關する唯一の詳細なる資料は Karl Krumbacker 等の名著 Geschichte der byzantinischen Literatur bis zum Ende des oströmischen Reiches の中止ある。回教徒の史家に關しては D. S. Margoliouth, Lectures on Arabic Historians の小著と最も傑出や回教史家 Nathaniel Schmidt, の Ibn Khaldun に關する良著がある。

ルネサンスの修史に關しては、Schvill, Morley, Gebhardt, Gervinus のローランバ史に關するもの、Joachimsen の「イツ人文學者歴史に關するもの」など特殊部門に關する著作は存するも、その全般に亘る著述は一冊も存しない。宗教改革の修史に

歸してゐる類説著は存しならが、しかる Gustav Wolf, Quellenkunde der deutschen Reformationsgeschichte の中には當期の資料に關する記念碑的の技術的評論がある。ルネサンスと宗教改革期に於ける修史の傑出やる記述を含んだ近世全般に亘るものにはペイズの卓越せる史家 Eduard Fueter, Geschichte der neueren Historiographie の叢書がある。また、歸正した佛譯を有したか、最近（一九二六年）訳正増補版を出した。Adolf Rein, The Problem of European Expansion in Historical Writing の中には、海外發展のヨーロッパの修史に及ぼした影響を巧に概説してゐる。合理主義の時代の傑出やる史家ヴァルテール・ルード・ロバートンハーベンは John B. Black, The Art of History の中に論せられてゐる。本書は簡潔なやう修史史の中最も平易にして聰明なる著述である。浪漫主義の修史については前述のフックの著述中に最

も論評やられてゐるが、Fueter も見事な略述をしてゐる。國民主義の修史と歴史的批判的修史の勃興は George Peabody Gooch, History and Historians in the Nineteenth Century の中で見事に記述されてゐる。最近では Louis Halphen 編の Histoire et historiens depuis cinquante ans, 2 vol (1927—1928) 及び Steinberg 講述の The Historical Science of the Present in Individual Exposition の中で描寫されてゐる。

西洋諸國を取扱つた修史の歴史や尠へない。しかし最もよく取扱はれてゐる。近世に於けるフックの著述を巧に概説してゐる。合理主義の時代の傑出やる史家ヴァルテール・ルード・ロバートンハーベン John B. Black, The Art of History の中に論せられてゐる。本書は簡潔なやう修史史の中最も平易にして聰明なる著述である。浪漫主義の修史については前述のフックの著述中に最

十九世紀は Georg Below, Die deutsche Geschichtsschreibung von den Befreiungskriegen bis zu unsern Tagen. もとへ取扱はれてゐる。ハラハバに於ける國民主義及び學究的歴史の發達の最良の記事は Louis Halphen, L'histoire en France depuis certains の中には見いだす。Benedetto Croce は前出第三回に關するイタリー修史の廣汎なる記事を書いた。羽仁五郎氏の『歴史敍述の理論及歴史』はその邦譯である。英國の修史については完全な記事は存しないが、グーチの前述の書物には第十九世紀の英國史家に關する多くの資料を含んでゐる。英國の修史に關する唯一の重要な特殊著述は Thomas P. Pardon, The Transition in English Historical Writing, 1760—1830 である。ヨーロッパからインガーレンに至る時期の卓越せる記事である。本書は合理主義、浪漫主義、及び國民主義的歴史記述の起原を取扱つてゐる。Petrus Block は『オランダ

の修史』に關する要著を出づ。Paul Milukov はシヤの修史に關する諸著を挙したが、その中にはシヤ修史の諸潮流』がある。アメリカの修史に關しても全般的に概観したものは存しない。數年前 J. Franklin Jameson は傑出した入門書 The History of Historical Writing in America を書き、Motley, Parkman, Prescott, Bancroft などの文學的大史家を総じてゐる。この人達は、Force などの編纂家達と合せて John S. Bassett, Middle Group of American Historians の中で一層好く取扱はれてゐる。更に最近の盛期は Theodore Clark Smith, William A. Dunning, Allan Nevins, A. M. Schlesinger 1 著にして概括せられてゐる。米國修史の包括的記述が刊行せられたならば大に利やうといふのがある。文化史及び智力史の發生と性質に關する唯一の廣汎なる記述は Harry Elmer Barnes, The New History and the Social Studies である。F. J. Teg-

gart, Prolegomena to History; The Process of History; The Theory of History の中には社會科學としての歴史觀の發生を巧に論じてゐる。修史全般についての唯一の包括的歴史は Moritz Ritter, Die Entwicklung der Geschichtswissenschaft in den führenden Werken betrachtet. にあるけれども、不完全であり、且つリッターの判断も往々にして動搖してゐる。

五、フレステド石器時代の文化(下)

間崎万里譯

第二章 太古の食物生産者

四、新石器時代

二八、ナイル峡谷の河床には當初土壤を存しなかつたけれども、中石器時代の終までに、ナイル河は既にエチオピヤの高地から多量の黒土を下流に運搬し始めてゐた。毎季同山地に於ける夏の降

雨は上ナイルの水量を増したので、その河水は兩岸の上に高まり、この泥水はエジプトのナイル濠の底面に擴がつたので、黒い泥土の薄い層を残した。この沈澱物が遂に黒土からなる深い河床を作り、蜿蜒たるナイル河の兩側に左右に屈曲せる帶状線を形成した。今日に於ては黒土からなるこの河床は、河の兩側に於ける右の帶状線を含み、その幅十哩を超ゆることは稀である。かくして出来た保護された綠地に住める中石器時代の人類は、我等が新石器時代と唱へてゐる新時期に這入つたものと認めなければならないほどに、生活様式を改善することが出來た。

二九、前述の如く、長らくサハラ高原に住んでゐた獸類もまた食物と水を得んがために、ナイル河の峡谷に隠れ家を求めることが必要を知つた。この峡谷には沼地が多く、野禽の大きな群れにも野獸の大群にも歓迎せらるべきホームを與へた。

雨は上ナイルの水量を増したので、その河水は兩岸の上に高まり、この泥水はエジプトのナイル濠の底面に擴がつたので、黒い泥土の薄い層を残した。この沈澱物が遂に黒土からなる深い河床を作り、蜿蜒たるナイル河の兩側に左右に屈曲せる帶状線を形成した。今日に於ては黒土からなるこの河床は、河の兩側に於ける右の帶状線を含み、その幅十哩を超ゆることは稀である。かくして出来た保護された綠地に住める中石器時代の人類は、我等が新石器時代と唱へてゐる新時期に這入つたものと認めなければならないほどに、生活様式を改善することが出來た。